

廣池千九郎と地球倫理

—21世紀の「三方よし」に向けて—

犬飼孝夫

廣池千九郎は「最高道徳実行の第二根本精神」の一つとして「他を救うにあらずして己れを助くるにあることを悟る」という格言を残している。他者に対して道徳的なはたらきかけをすることは、他者の為というよりも、むしろ自分の為になるというのである¹。

最高道徳における「自分の為」とは、過去における自分の道徳的負債を返済し道徳的過失を償うというように、贖罪的で受容的な心で自分の品性を高めていくことを意味している²。廣池によれば、他者への道徳的はたらきかけの究極的な目的は、自らが「自己の真の利益」を得ること、すなわち自分の「品性を向上、完成させること」なのである。

廣池はまた、道徳の本質は犠牲的なものであるとして、「道徳は犠牲なり相互的にあらず」という格言も残している。これは、道徳は本来的に犠牲的なものであり、相手や第三者からの感謝や返礼を期待して行うべきものではないということである³。

この他に「忠誠に努力して要求せず」「自ら苦勞してこれを人に頒かつ」などの格言が示すように、他者に対する道徳的はたらきかけの「結果」については、それを求めない、思わない、期待しないという心構えであることが大切であると廣池は教えている。他者への道徳的行為は何らの「見返り」を求めず、期待せずに行われるべきなのであり、「いま一段幸福になりたい」という「積極的欲望」に基づく行為は利己心の現れであると廣池は言う⁴。

*

最高道徳においては、自分の品性を磨き高め続けることが、他者への道徳的行為の目的となっている。一

方で廣池は「最高道徳は、人心の開発及び救済ということを目的として、一切の精神作用及び行動を始むるのであります。故にその道徳実行の動機が、常に相手方と第三者との双方の幸福産出の上に存在してあるのであります」とも述べている⁵。廣池によれば「最高道徳は自己・相手方及び第三者のいずれにも幸福を与えるを目的⁶」とするものであり、自分も良く、相手も良く、世間も良くなること、すなわち「三方よし」を理想としている。

井出元は、以下の廣池の遺稿を紹介している。「最高道徳はいかなる場合でも、真に自分の助かる事、すなわち幸福になる事を目的とするので、他人とか、社会とかという事を眼中に置く事なしに、すべてを思考し、決断し、実行するのです。真に自分の幸福になる事ならば、他人と社会とは自分より前に、自分のために幸福を享くようになっておるからです。すべてこの最高道徳の各項目、約百か条の意味でも、皆こういう心持ちにて解釈するのです⁷。」

これは、他者への道徳的行為すなわち「他者救済」が「自己救済」につながり、「自己救済」が「他者救済」をさらに促進するという善の循環を通じて、インド大乘仏教中観派の祖である竜樹が述べた「他を利するとは即ち自らを利するなり」を体現することを意味している⁸。

*

私たちは自らの品性を向上させるため、「一には過去の贖罪が出来、二には未来における積徳が出来るという楽しみを含んで⁹」、現在の「今ここ」において、身近な人々に対して道徳的に接していくことが大切だ

¹ 廣池千九郎『新版道徳科学の論文』第8冊（廣池学園事業部、昭和60年）197頁。

² 財団法人モラロジー研究所編『改訂廣池千九郎語録』（広池学園出版部、昭和56年）146頁。

³ 財団法人モラロジー研究所編『「モラロジー概説」用語事典』（広池学園出版部、昭和58年）356頁。

⁴ 『改訂廣池千九郎語録』146頁。

⁵ 『新版道徳科学の論文』第8冊371頁。

⁶ 『新版道徳科学の論文』第8冊369頁。

⁷ 井出元『廣池千九郎の遺志』（公益財団法人モラロジー研究所、2011年）240～241頁。

⁸ 廣池千九郎『新版道徳科学の論文』第7冊（廣池学園事業部、昭和60年）128～29頁。中村元『自己の探求』新装版（青土社、2000年）74～75頁。奈良康明『仏教名言辞典』（東京書籍、平成元年）220頁。

⁹ 『新版道徳科学の論文』第7冊212頁。

ろう。しかしながら、国際社会と地球環境が大きく変革・変動しつつある今日、私たちは、廣池の言う自分と相手と世間という関係性の範囲を拡大し、グローバルな視座を持つ必要があるように思われる。

廣池千九郎は「人類の生存、発達、安心、平和、幸福の実現を目的とする学問¹⁰⁾」としてモラロジー(morality)を創建した。世界の諸聖人の思想哲学を比較研究し、そこに通底する質の高い道徳、すなわち「最高道徳」を『道徳科学の論文』のなかで提示した学祖・廣池千九郎は、比較文明学の開拓者とも言えよう。また「人類の生存、発達、安心、平和、幸福の実現」を目指すモラロジーという「道徳学」そのものが、新たな文明の創出を目指す壮大な使命を帯びた文明論とも言えるだろう。

21世紀を生きる私たちが、他者との関係性のなかで道徳を実行していくうえで持つべき視点として、つぎの「3つのP」を提示したい。

1つ目の「P」は、同時代を生きる他の人々、人類社会、すなわち「people ピープル」である。2つ目の「P」は、地球の自然環境、すなわち「planet プラネット」である。3つ目の「P」は、今後の世界を担う子孫、すなわち将来世代、「posterity ポステリティ」である。国内外で困難な課題・状況に直面している人々、近代文明によって資源として搾取されてきた地球の自然環境、そして、今後の世界を担う未来世代の子孫に対して、共感的・利他的な眼差しを向けることが必要である。この「3つのP」は、21世紀における「三方よし」の枠組みとも言えよう。

こうした視座を持ちつつ、私たちが目指すべきものは「人類の生存、発達、安心、平和、幸福」が実現される新たな文明社会である。京セラ株式会社名誉会長の稲盛和夫氏は、人類は「利他の心」に基づいて、足るを知るべきであり、「利他」に基づく生き方を選択するのならば、欲望に基づく文明をはるかに凌ぐ、高

度で豊穡な精神的文明を築き上げることができると述べている¹¹⁾。

このような「利他の文明」を構築していくうえで重要と思われる「7つのS」を提示したい。まず私たちは自然と共生しつつ、現代文明の「持続可能性」(sustainability)を実現していく必要がある。そのためには、現代文明を担ってきた人類社会が「自己反省」(self-examination)し、「科学技術」(science)を「叡智」(sapience)をもって運用していく必要がある。そして、大自然に対する畏敬の念を抱きつつ、自らの「精神性」(spirituality)を高め、足るを知り、欲望を抑えた「質素な生活」(simplicity)へと転換していくことが必要である。そして何よりも、一人ひとりが新約聖書に登場する「善いサマリア人」、すなわち「利他的な人間」になるべく、人類社会の「共感的な慈悲、思いやりの心」(samaritanism)を深めていくことが求められている¹²⁾。

この「3つのP」と「7つのS」は、「人類の生存、発達、安心、平和、幸福」を実現し、自然環境とも調和する「利他の文明」を築いていくためのキーワードであり、人類が共に認識し実行すべき「地球倫理」の枠組みになり得ると思われる。

*

廣池は『道徳科学の論文』のなかで靈魂不滅説を提唱している。品性の向上とは、私たちが自分の「魂」を磨き続けていくことを意味しよう¹³⁾。私たちは日常のなかで道徳の実践に努め「魂」を練磨し続ける一方で、「変容の時代¹⁴⁾」とも言える今日、その視野を家族、近隣、職場、地域社会から、国家、国際社会、地球環境へと広げなければならない。廣池が悲願とする「人類の生存、発達、安心、平和、幸福」を実現すべく、「利他の文明」を構築するという文明論的な視座を持ち、そこに参画していくことが求められている。

¹⁰⁾ 公益財団法人モラロジー研究所編『改訂テキストモラロジー概論』(廣池学園事業部、平成21年)2頁。

¹¹⁾ 京セラ株式会社「『世界経済フォーラム』年次総会で講演」2013年2月7日<<http://www.kyocera.co.jp/inamori/news/news103.html>> 29 September 2016.

¹²⁾ 日本聖書協会『聖書新共同訳』「ルカによる福音書」10章25節～37節。

¹³⁾ 廣池千九郎『新版道徳科学の論文』第9冊62～64頁。中村元『自己の探求』78～79頁。

¹⁴⁾ 伊東俊太郎『変容の時代：科学・自然・倫理・公共』(麗澤大学出版会、2013年)。